

保育現場における「気になる」子どもに関する研究動向と展望 — 子どもの保育、保護者支援、保育者支援の視点から —

中山 智哉

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2015年5月29日受付、2015年7月9日受理)

【要旨】

現在、保育現場では「気になる」子どもに対する保育やその保護者への支援が一つの課題となっている。また、近年「気になる」子どもをめぐるには、多くの研究が報告されている。そこで本稿では、2005年～2014年の10年間における「気になる」子どもに関する研究動向を『子どもへの保育内容・支援』『保護者支援』『保育者支援』の3つの観点から整理し、今後の研究の発展や現場実践に寄与することを目的とした。『子どもへの保育内容・支援』に関する研究動向についてみると、保育のクラス集団（仲間関係）の特性を活かした、社会的相互作用による「気になる」子どもの育ちの可能性が示唆されている。また、保育者の働きかけについての実証研究も蓄積されてきている。『保護者支援』に関する研究動向では、多くの保育者が難しさを抱えているとの報告が多く、特に保護者との間で、子ども育ちに対する認識のズレが生じる場合に、その難しさが顕著になるとの指摘が多い。『保育者支援』に関する研究動向では、保育現場へのコンサルテーションの有効性として、保育者の心理的な負担の軽減や保育者の専門性の向上に寄与する可能性が示されている。

I. はじめに

近年、保育現場では、発達障害とその周辺に属する、いわゆる「気になる」子どもへの保育・支援が重要な課題となっている。「気になる」子どもの明確な定義はないが、これまでの知見から「調査時点では何らかの障害があるとは認定されていないが、保育者にとって保育が難しいと考えられている子ども（本郷ら2005）」、「発達障害児を含めた、保育現場で保育者が気がかりになる子ども（日高ら2008）」、「発達障害と共通した特徴が認められるが、はっきりとした診断がついておらず、保育者がその子どもに対してどのように関わってよいか戸惑う子ども（藤井ら、2010）」などの状態像を示す子どもと捉えられている。

文部科学省（2012）は、小中学校の通常学級に在籍する生徒児童のうち、発達障害またはその特徴が疑われるものが6.5%であることを報告している。幼稚園、保育所については、文部科学省による公式な資料はないものの、多くの研究者の調査により、「気になる」子ども

が一定の割合で保育現場に存在することが明らかになっている（例えば、平野ら、2012）。2008年3月改定の幼稚園教育要領・保育所保育指針において、障害のある子どもの保育に関して、指導計画の中に位置づけながら子どもの状態に合わせ柔軟な保育を行うことや、個別の計画の作成、保護者や他機関との連携の必要性が示されており、「気になる」子どもに対する保育は、今後ますますその必要性と専門性が求められることが理解される。

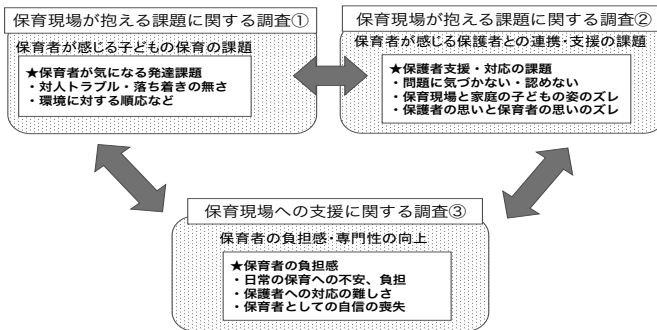
しかし一方で、「気になる」子どもに関する保育現場での困難さは解決されないままである。尾崎、吉川（2009）は、「気になる」子どもの保育において「発達に応じた適切な指導」「保育への迷い」「他児保育との兼ね合い」など、通常の保育活動において多くの保育者が困難感を抱えていることを明らかにしている。また、神長ら（2005）は、「気になる」子どもを担任する保育者は、その対応やクラスのまとまりのなさを自らの保育実践力の低さとして捉え、自信喪失となるケースがあることを指摘している。さらに吉兼、林（2010）が、保育者を対象に行った調査では、「気になる」子どもを受け持つ保育者のバーンアウト指数（燃え尽き症候群指数）が高いことを指摘している。

また、保育者が難しさを抱えているのは、「気になる」子どもの保育だけではなく、その保護者への連携や支援である。斎藤ら（2008）は、96.6%の保育者が気になる子を保育した経験があり、保護者との関わりで「意識の食い違い」が生じたり「伝えたことで関係が悪化」したりすることが多いことを明らかにしている。

最も直近に実施された調査としては、津田、木村（2014）によるものがある。津田らは、全国391保育所の保育士2,346名を対象に「気になる」子どもに関する認識と支援体制についての質問紙調査を行った。その結果、クラスに「気になる」子どもがいると答えた割合は、全体では83.6%であった。子どもの問題としては、「対人トラブル」、「落ち着きのなさ」、「環境に対する順応性」の順に多かった。また、保護者支援については、「保護者が問題に気付いていない」が80.7%、「問題に気付いているが認めたがらない」が49.2%、「健診等で指摘がないので問題ないと思っている」が42.6%など、保護者と子どもに対する認識のズレに苦慮していることが報告されている。このように、保育現場における「気になる」子どもをめぐる問題は、保育内容・方法、保護者対応など、保育者にとって喫緊の課題であることが理解される。

こうしたことを背景に、現在「気になる」子どもに関しては、多くの研究成果が報告されている。しかし、これまでの研究を概観すると、個々の研究者が独自に研究を行っているために、領域全体としてどのような知見が蓄積されているのか分かりにくい状況にある。また、そうした「気になる」子どもの研究動向を示した報告もあるが、研究動向の概観や公表数の推移に留まっている。このことから系統的に研究動向を整理し、今後の研究の方向性を示す必要があると考える。そこで本稿の目的は、これまで蓄積された研究を系統的に整理し、今後の研究の発展や現場実践に寄与することを目的とした（図1）。

図1 本研究の枠組み



それぞれの研究の蓄積と方向性

II. 方法

本稿では、2005年～2014年の10年間における「気になる」子どもに関する先行研究を検討するため、国立情報学研究所の学術情報ナビゲータCiNiiを用いて、データベース検索を2015年3月に行った。検索に用いたキーワードは『「気になる」子ども』、『保育』の二つとした。その中で、「子どもへの保育内容・支援」「保護者支援」「保育者支援」の3つの観点に合致する学術論文に絞った。なお、分類については筆者の主観によるものであることを付け加えておく。

III. 結果

1. 保育中での子どもに対する支援

(1) 保育者が「気になる」子どもの特徴と保育者の困難さ

まず、保育者が「気になる」子どもの特徴をどのように捉えられているのか、また「気になる」子どもへの保育上の対応として、保育者がどのような側面に難しさを抱えているのかについて、過去の研究を概観していく。

本郷(2006)によると「気になる」子どもの特徴は、場面をかえたり、次の行動に移ることが難しい、こだわりが強くルールなどが守れないといった「状況への順応性の低さ、こだわり」、思い通りにならないと、友だちを叩いたり、乱暴な言葉がでる。友だちの遊びを妨害する「他者への乱暴、暴言、妨害」、落ち着いていなくてはいけない場面で、立ち上がったたり、動き回ったり、周りの子どもにちょっかいを出したりする「落ち着きのなさ、集中力の低さ」、話しかけても視線があわない、ぼうっとしていたり、一人でニヤッとする「意思疎通感のなさ、行動理解の難しさ」、自分ができなくなるとぐちゃぐちゃになってしまう。思い通りにならないとパニックをおこし、思い通りになるまで泣き続ける「情動コントロールの苦手さ」を挙げている。

こうした特徴は、保育場面において、仲間関係の形成や集団活動への参加など、いわゆる「社

会性」の側面に関する問題につながることが多い。下野未、稲富ら（2007）は、「気になる」子どもの特徴として、友だち関係や落ち着きのなさなど、集団場面における適応の難しさを挙げており、さらに「気になる」子どもへの保育者の対応については、個々の発達特徴に応じた個別的対応より、「集団から逸脱したとき注意する」「集団をできるだけ落ち着かせようとする」「ルールを伝える」等の、集団活動への参加や、集団活動の維持を意識した対応が多いことを明らかにしている。また、溝口（2014）も、「気になる」子どものつまずきの多くは、他者との相互交渉に問題に起因することを明らかにするとともに「気になる」子どもの支援としては、クラス集団の遊びや生活を通して他児との関係性が成立する経験を促していく必要があると指摘している。

これらの調査から、保育者は「気になる」子どもの特徴の中でも、特に他児との関係や集団的行動など社会性の側面に関して、保育上の対応の難しさや気がかりな思いを抱えていることがわかる。一方で溝口（2014）が指摘するように、こうした「気になる」子どもの社会性の育ちを、どのように捉え、支援するかは保育上の一つの課題であることが窺える。

(2) 「気になる」子どもの社会性の育ち

「気になる」子どもの社会性の育ちについては、いくつかの事例研究によって知見が示されている。大野（2013）は、「気になる」子ども1名を対象に、入園から卒園まで継続的に支援した報告の中で、時間の経過とともに、対象児がクラスの中にいる時間が増え、クラスメートとの関わりが増えたことを明らかにしている。その要因として他児が成長・発達することによって、対象児を支えてくれるというクラス集団としての育ちが重要であると指摘している。

野村（2007）は、衝動性が高く、言語による自己調整に課題を持つ男児の2年半にわたる保育実践を振り返り、対象児を含めた集団保育のあり方を検討した。そこでは、保育者がいていねいに子どもたち他者認識を広げ、集団内におけるお互いの思いをつなげる働きかけを重視したクラスづくりを進めた結果、仲間集団が育ち、対象児の発達のな変化と集団内の自己肯定感を促進したと報告している。

湯澤ら（2010）は、保育者の働きかけに焦点を当て、アスペルガー症候群の男児の姿を9ヶ月に渡り観察した。その中で、保育者は対象児の特性に応じた遊びの発展、また保育者—対象児の個別対応に終わるのではなく、周りの子どもたちの存在を意識した支援を行っていた。そのことで対象児の体験、他の子どもに共有され、また、対象児に関わる問題を、他の子どもたちが一緒に考え、解決していく体験へとつながったことを報告している。

これらの事例研究からは、保育者が「気になる」子どもを個別的に支援するだけでなく、周囲の子どもを含む、クラス集団として育てる視点が、「気になる」子どもの育ちにもつながることが理解される。また、対象や観察期間の違いはあるものの、仲間との相互交渉の機会が保障されることが、当初の対象児の社会的なスキルを向上させている要因であることが理解される。

(3) 社会性を促進する遊びの形態と効果検証

子ども同士の関係をつなぐことは、集団活動や友だち関係に難しさを抱える「気になる」子どもにおいても、その社会性を発展できる可能性が示唆されている。幼児期において、仲間関係を形成する中心は当然遊びである。では、どのような遊びが「気になる」子どもが、他児と場を共有しやすい、また相互作用を生み出しやすいのか。示唆深い研究として飯島による研究がある。

飯島(2009)は、「気になる」子どもの社会的遊びへの参加を検討することを目的に、保育者が「気になる」子ども(10名)を対象に、ルール遊びとコーナー遊びにおける協同遊び(一定の目的のために、一緒に何かをつくる、役割を決めて協力する、調整する)について観察、行動分析、行動評価を行った。その結果、ルール遊びはコーナー遊びに比べ協同遊びへ発展するケースが多いことが明らかとなった。また、その後、1事例についてより詳細に検討した結果、子どもの問題行動自体が減少しなくても社会的遊びに参加できることが明らかになった。これらの結果から、飯島は「気になる」子どもへの支援は、ルール遊びの経験の重要性と、自由遊びへの保育者の介入の重要を指摘している。

こうしたルール遊びの効果を実証的に調査した研究もある。小林(2013)は、幼児の集団を対象に継続的にボールゲーム遊びを導入し、社会的スキルの発達過程を検討した。約4ヶ月間(2期)にわたって、週に1回の頻度でボールゲームを実施したところ、幼児の社会的スキルが上昇したことを報告している。特に、社会的スキルの中でも、自分の意見を言うなどの「主張」はゲーム導入後からすぐに上昇し、周囲との「協調」は時間の経過に伴って上昇した。またこの結果は、観察調査によるゲーム遊びの際の子どもの話し合い場面の質的变化にも対応していることが確認されている。さらに小松、小林(2014)は、保育所の年長クラスに在籍する「気になる」子ども(高機能広汎性発達障害の男児)に対する支援として、保育の中に仲間関係の構築を企図した集団ゲーム遊び(ボールゲーム、鬼ごっこ)を導入し、社会的スキルの発達過程を検討した。その結果、支援期間9ヶ月間の中で、対象児が他者の気持ちを考えたり、他者に協力したりする行動が増えるなど、社会性の発達がみられたことを報告している。

これらの調査から、「気になる」子ども特徴を踏まえると、子ども自身の役割が明確ではない自由遊びより、役割が明確なルール遊びのほうが、子ども同士の関係を作りやすいことがわかる。また、ルール遊びの経験は、「気になる」子どもの社会性の育ちに貢献しうることが示唆される。

(4) 保育者の「気になる」子どもへの認識・対応の影響

「気になる」子どもの社会性の促進を促す保育の重要性や具体的提案とともに、そこに介在する保育者の認識や対応の重要性を指摘する研究もある。

松永、大久保（2012）は「気になる」子どもへの保育者の対応が、周囲の子どもたちに与える影響を調べるため、実験場面における検証を行っている。その中で、逸脱行動をとりがちな子どもに対する他児の好意度（仲良くなりたかどうか）や認知は、保育者の言葉がけがネガティブな場合、よりネガティブな方向に影響を受けることを明らかにした。

また、松永（2013）は、こうした保育者の対応が子どもに影響を与えることに関して、どの程度保育者が認識しているかについての調査を実施した。調査の結果、62.5%保育者がその影響の強さを意識していることが明らかになり、影響の内容としては、保育者の対応と同方向の評価をすると考えている者が70%程度、また、マイナスの評価をすると考えている保育者も20%ほどいることが示された。

これらの研究からは、「気になる」子どもに対する保育者の働きかけが、他児の当該児に対する好意度や認知に影響を与える可能性が示唆される。また、保育者も、自分の子どもに対する働きかけが、子どもに強く影響をすることを認識していることがわかる。

一方で保育者のクラス集団意識したかかわりについて指摘した報告もある。増田、石坂（2013）は、保育者の多くがクラス内の集団生活を直接的に乱すことにつながる行動をとる子どもを「気になる子」と認識しがちな傾向にあることを示す一方で、こうした保育者の認識の背景に、クラス単位の保育を志向する保育者の集団主義的思考が影響している可能性を指摘している。文部科学省（2004）は個別の教育支援計画について、その作成目的を「障害のある児童・生徒の一人一人のニーズを正確に把握し、教育の視点から適切に対応して行くという考えの下、長期的な視点で乳幼児期から学校卒業後までを通じて一貫して的確な教育的支援を行うこと」としている。集団保育の中で、個をどのように捉え支援するのか、クラス経営や他の子どもとの関係と併せて重要な課題といえる。

2. 保護者支援・連携

（1）子どもの発達に対する保護者と保育者の認識のズレ

現在、保育現場では「気になる」子どもを持つ保護者との連携や支援において、多くの難しさに直面している。ここでは保護者との連携や支援の際にどのような点について、保育者が難しさを感じているかについての研究動向を概観していく。

中嶋ら（2012）が実施した保育所を対象にした調査では、58.1%の施設で、気になる子どもの保育に困難なことがあると回答しており、その主な内容としては、子どもの保育とともに、保護者への対応や支援に関してであった。具体的には、気になることについて保護者への伝え方が難しい、保護者とゆっくり話し合う時間がない、保護者の理解が乏しく支援を聞き入れていただけないであった。また、平野ら（2012）が幼稚園・保育園のクラス担任を対象に実施した調査でも、保護者と保育者のあいだで「気になる」子どもをめぐる認識にズレがある場合、その対応に困難さがあることを明らかにしている。

こうした保育者・保護者の子どもに対する認識のズレについて実証的に検討した研究もある。大神（2011）は、子どもについて保育者と保護者間の認識の違いを明らかにするため、質問紙 SDQ（Strengths and Difficulties Questionnaire）を用いた調査を行った。SDQ は行動上の問題を「行為」「情緒」「多動・不注意」「仲間関係」「向社会性」要因から得点化できる、スクリーニングを目的とした質問紙である。保育所 4 歳児クラスに在籍する子どもの保護者 24 名と担任保育者 1 名を対象に、SDQ を実施した結果、「行為」「情緒」「多動・不注意」など多くの側面で保育者が「心配する」とした状況を、保護者が「心配なし」とする回答する傾向があることがわかった。また、気になる領域として保育者が情緒面、保護者では向社会性についてより心配していることが明らかになった。この結果について、大神は、保護者は保育者よりも子どもの育ちを楽観視する傾向にあるが、同時に保育の場と家庭で子どもの姿が異なることを反映した結果である可能性についても触れている。

これらの研究から、保育者と保護者の子どもに対する認識のズレは、多くの保育者が体験していることが理解される。また、保育者が認識する集団の中での子どもの特徴と、保護者が家庭で認識する子どもの姿には大きなズレがあり、集団の中で多くの子どもとのかかわる保育者のほうが、子どもの様々な側面で懸念を感じやすい傾向にあることが示唆される。

(2) 子どもの育ちと養育環境の関連

また、保育者が、保護者との連携の必要を強く感じる理由として、子どもの養育環境に対する懸念がある。現在は、社会情勢や家族形態の変化に伴い、家庭の養育力の低下が叫ばれている。実際に、子どもたちが保育場面で示す問題となる行動は、家庭環境に由来するものか、子どもが持つ特性なのか、また両方に関連するものなのか、その判断が難しいケースが増えている。ここでは、周囲の不適切な関わりや無理解が子どもの問題をさらに助長する可能性を指摘した研究について概観する。

郷間ら（2009）は、発達上の課題を有する巡回相談事例 119 例について、保護者がもつ養育上の問題点や子どもの持つ発達上の課題との関連について調査した。その結果、保護者の養育に何らかの問題があったケースは 61.3%であった。内容としては、手をかけない、手をかけすぎなど母親の養育態度に問題を有するものが多く、その他、母親の養育能力不足、父親の養育態度の問題、虐待の疑いなどであった。子どもの発達上の課題との関連では、保護者が養育上の問題を持つ子どもは、そうでない子どもより、多動性や衝動性など行動面に課題を有する場合が有意に多く認められた。また、結果の中で、診断がついていない「気になる子」のほうが、診断がついている障害児よりも、保護者の養育態度の問題が多かったことも指摘されている。

また、守、松井（2013）は、保育現場において、「気になる」子どもを育てる保護者の特性が、その子どもの特性と重複する部分があるかについて、保育者を対象に調査を実施した。そ

の結果、64%の保育者が「気になる」子どもの保護者への対応に難しさを感じていることが明らかになった。また45%の保育者が、「気になる」子どもと保護者の類似性を感じていた。その類似性としては「会話不成立・意思疎通困難」「暴力的言動」などが、多く回答されていた。この結果を受けて、守らは、保護者の気になる養育と子どもの気になる行動が循環性を持ち、相互に「気になる」状態を強化するような関係性になっていることを指摘している。

(3) 保護者支援における保育者の変容プロセス

このように子どもの気になる特徴に関して、養育環境に対する心配や懸念、また保護者に子ども保育の場での姿について理解してほしいという保育者の心情は切実なものであることが理解される。しかし一方で、大神（2011）の研究で示されているように、保護者は、保育の場での子どもの姿と家庭における子どもの姿との違いを感じているケースもある。また、保護者も家庭での養育の中で、子どもとの愛着関係の築きにくさや子どもが起こすトラブルなどによって、心身ともに疲弊する状況を多く体験していることがわかっている（中田、筒井、2014）。

こうした保護者の心情や状況をどのように理解し、保育者の思いを伝えていくのかについて、保育者視点から、そのプロセスを描いた研究がある。木曾（2011）は、「気になる」子どもの保護者との関係の中で現れる保育士の困り感に着目し、その変容プロセスを明らかにするため、5名の保育所保育士にインタビュー調査を行った。そこで明らかになったのは、第一に「気になる」子どもの保護者に関わる際に、保育士は、保育者・保護者の共通理解、早期療育の必要性など「子どものための思いの基盤」を常に持ち合わせている。そして、そこから子どもに対する認識のズレなど「保護者との思いの対立」という経験を経て、保育士の働きかけが「子どものために理解を求める」から保護者の心情や状況を理解するといった「保護者に合わせる」へ変わっていく変容プロセスである。ただし同研究からは、「保護者に合わせる」関わりが変わっても、保育士は「子どものための思いの基盤」と「保護者に合わせる」の間に葛藤を抱え続けることも指摘している。

3. 保育者（現場）支援および保育者の専門性の向上

(1) コンサルテーションの役割と有効性

「気になる」子どもへの保育現場を対象とした調査から、保育者が「気になる」子どもの保育上の対応の問題、また保護者との連携や支援をする際の難しさを抱えていることが明らかになっている。また、こうした保育現場が抱える困難感に対して、保育者からは心理士等、外部の専門職や他機関との連携の必要性を訴える声は多い（藤後ら、2010）。ここでは、外部の専門職・他機関によるコンサルテーションの役割や有効性に関する研究を概観する。

丹葉、大西、尾藤（2011）は、「気になる子ども」を担当する保育士に対して、子どもの行

動の捉え方や関わり方について、助言や指導を行う間接的支援を実施した。支援開始当初、保育士は子どもの気になる行動に対し直接的に指導し、保育士が望む行動を促す関わり方が多く見られ、子どもの気になる行動が助長されていた。しかし、記録方法の工夫や気になる行動に対する分析の視点を提示していくことで、保育士は子ども側の視点から気になる行動を捉え、関わり方にも変化が見られた。

守、中野、酒井（2013）は、外部専門家のコンサルテーション後に、保育者主体の保育実践がどのように実践されるのかを検討した。専門家による保育者の「焦燥感の引き受け」「子どもの行動の意味の言語化」「保育者の主体的判断の促しと選択の余地の設定」が、協働的な関係作りを成功させる要因として抽出され、さらにコンサルテーションを活かした保育実践が、保育者自身の主体性や専門性を向上するプロセスとして機能し得ることを明らかにした。

さらに守（2012）は、「気になる」子どもを担当している幼稚園教諭に対し、フィールドノーツと用いたコンサルテーションを実施した。6ヶ月の支援期間の中で、「子どもの集団適応」や「保護者の変容」などに一定の効果が確認されるとともに、協働的に支援策の話し合いを繰り返すことで、担任教師の心理的圧迫感の軽減と、保育への省察が深まったことを報告している。その中で守は、コンサルタントの一方的な助言や励ましではなく、コンサルティとコンサルタントが話し合い、協働して対応方法の検討をすることの重要性を指摘している。

これらの報告から、保育現場へのコンサルテーションの有効性として、保育者の心理的な負担の軽減だけでなく、子どもへの対応に関する新たな視点の獲得、子どもへの省察の深まりなど、保育者の専門性の向上につながるということが理解される。また、保育コンサルテーションの役割も、近年では専門家による一方的な指導・助言という捉え方ではなく、保育者の主体性を活かし専門性の向上に寄与する協働的なスタンスが有効であることが明らかになっている。

（2）コンサルテーションプログラムの開発と効果

また近年、保育コンサルテーションについては、プログラム開発とその効果の検証、共有化のための客観的指標の有効性などについて、実証的に検討した研究が報告されている。

藤原ら（2010）は、「気になる子」を担当する幼稚園教諭に対する応用分析行動学の観点から集団コンサルテーションプログラムを作成・実施し、その効果を検討した。6名のコンサルティに全6回のプログラムを実施し、行動の見方や対応方法を応用行動分析学に基づき教授した。また、グループワークにおいては、コンサルティが行った「気になる子」の観察記録をもとに対処方法を検討した。そうした対応をコンサルティが保育実践した結果、対象児の行動に改善がみられた。さらに、コンサルティが子どもに対応する際に感じるストレスが軽減し、保育者としての効力感が向上したことを報告している。

重成（2014）は、保育所保育士4名を対象に Teacher training を実施し、保育実践への活用、および気になる子ども以外の子どもの保育への効果について検証した。Teacher training とは、

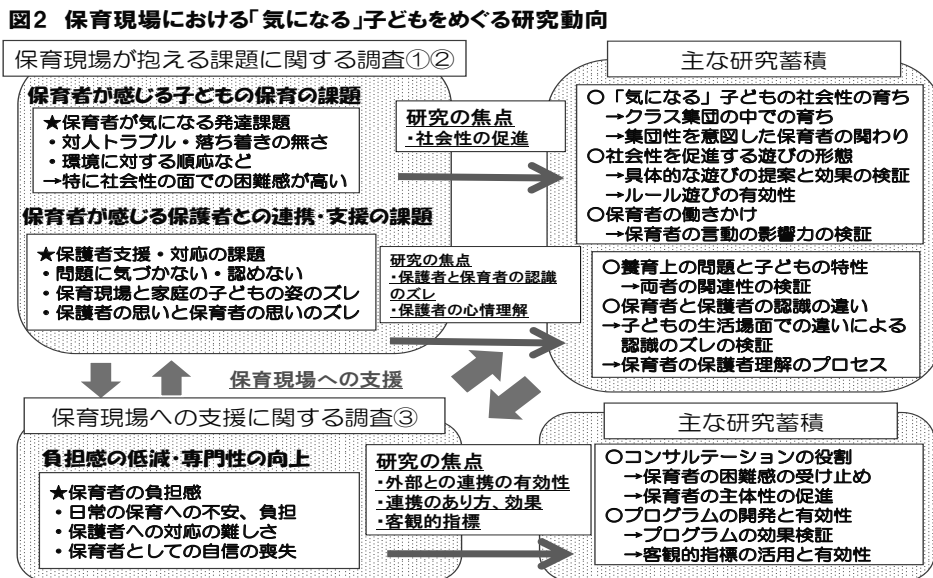
行動理論の基本的な考え方の教授とスキルの練習、実践を行うための宿題などで構成されたプログラムであり、Parent training を教師・保育者に応用したものである。その結果、指導観にすべて反映されていないものの、「行動の理由を知ってかかわる」「冷静に行動を見て適切なかかわりをする」「先入観にとらわれず、子どもを褒めて伸ばす」「行動を理解し対応の仕方を知る」に関する気づきや実践への活用が見られたことを報告している。

阿部（2013、2014）は、「気になる」子どもの支援を保育士同士の相互協議を通して、その専門性を高めることを目指したプログラムの開発と効果を検討している。このプログラムは、「行動の分析&支援シート」を活用し、外部専門家による保育参与観察とファシリテート、そして保育者間協議を軸にしたプログラムである。プログラムを実施した結果、保育士の意識が専門家への依存者から、保育の主体者へと変容したことが示唆された。また、コンサルテーションに用いた「行動の分析&支援シート」は、保育士の主体的な取り組みを支え、気になる子どもの支援体制作りにも寄与できるツールとなったことを報告している。

このように、まだ数は少ないものの保育現場への効果的なコンサルテーションプログラムの開発が進んでいる。また、行動科学による手法や、客観的指標を用いた子どもの行動の可視化・共有化、そして保育者の主体的な協議参加への工夫など、その効果の検証も少しずつ進んでいることがわかる。

IV. まとめ

これまでの「気になる」子どもをめぐる研究動向を概観すると以下のように示される（図2）。



1. 保育の中での子どもに対する支援

まず「気になる」子どもの保育に関する研究動向についてみると、事例研究を中心に、保育のクラス集団（仲間関係）の特性を活かした、社会的相互作用による「気になる」子どもの育ちの可能性が示唆されている。また、観察研究を通じて、「気になる」子どもたちの遊びが継続しやすい状況は、自由遊びより、ルール遊びであることが示されている。さらに近年、そうした遊びの効果を測定する研究もみられ、ルール遊びが社会性の育ちに寄与していることが実証的に明らかにされている。

このように、これまでの保育現場を対象にした研究知見からは、発達障害児や「気になる」子どもに対しても、クラス全体の支援を通じて仲間関係や集団性を育てることは効果があり、保育現場の特徴を活かした支援の有効性が示唆されている。通常、障害児の支援では、特別支援教育や療育を中心に子どもの特性に応じた個別支援の必要性が求められており、兼ねてからその効果も実証されている。しかし、集団保育の中での育ちが示される研究結果の蓄積から、様々な側面での子どもの発達可能性を考慮する視点が有用であることが理解できる。また、これらの研究は、幼稚園教育要領や保育所保育指針が示す、保育内容のねらいに応じた保育の重要性を意味するとともに、日常の保育が「気になる」子どもの成長に寄与している可能性を推測させる。

しかし、現在、「気になる」子どもに対するや発達障害に対する専門知識や支援方法に不安や不全感を感じる保育者は多い（河内、2006）。これらのことを踏まえると、「気になる」子どもを含めた通常保育をどのように展開していくか、遊びのアイデアや介入のヒントを示す研究成果とともに、日常の保育の効果を保障するための研究成果が必要といえる。そのためには、仲間関係や遊びがどのように子どもの育ちに寄与しているのかを実証する研究の蓄積が今後必要といえるだろう。

一方で、保育者の介入の重要性も同時に指摘されている。保育者の働きかけが、子どもの他者認知に影響を与えること、また、保育者がそのことを意識している研究結果が示されている。日常の保育場面では、子どもの特性に応じた保育者の配慮はあるものの、現実として子どもの問題となる行動に対して、否定的に捉えざるえない状況があるのは事実だろう。保育者が特別な支援を必要とする子どもの特性に応じた支援や配慮を行う“個別性”とともに、クラス経営や仲間関係の育成といった“集団性”を両立すること、つまりは「気になる」子どもの情緒的・行動的な問題に対して、他児の認識を意識しながら、援助を行うことの難しさについて、どのように向き合うかは重要な課題といえる。

これらを踏まえ、今後の研究課題としては、保育者がそうした個別と集団の葛藤をどのように統制しているのか、またはどのような状況で統制できないのかについて、個人的要因や組織的要因を明らかにすることが必要といえるだろう。また、守、山崎、駒井（2013）は、「気になる子ども」への効果的支援として、「個別的支援の実施」「クラスにおける集団作り」「保育

者による保育展開の工夫」といった保育実践に即した総合的支援の効果の検証と必要性を述べている。このように、これまでの知見を踏まえ、総合的に捉え分析する観点も、今後の研究の中では重要となるだろう。

2. 保護者支援・連携

次に「気になる」子どもを持つ保護者に対する支援の研究動向をまとめる。「気になる」子どもをもつ保護者への対応や支援には、多くの保育者が難しさを抱えているとの報告が多く、特に保護者との間で、子どもの育ちに対する認識のズレが生じる場合に、その難しさが顕著になるとの指摘が多い。認識のズレについて、実証的に検討した研究からは、保護者は保育者に比べ子ども行動の多くの側面について楽観的である一方で、集団保育を多数の子どもとかわる保育者の視点と保護者の視点の違い、また家庭と保育の場での子どもに現れる行動の違いが、認識のズレに関連している可能性も指摘されている。

また、保育者が感じる養育環境への懸念を示す研究も報告されている。「気になる」子ども行動と養育環境が関連性を示す研究からは、「気になる」子どもの保育を進めるにあたって、その子自身と子どもを取り巻く人々との関係性の両面から捉える視点の重要性が窺える。しかし、「気になる」子どもを育てる保護者の特性と子どもの特性が類似した傾向にあるとの研究もあり、こうした面でも保護者との関係形成や連携の難しさが推測される。このように、保育者が、保護者の認識のズレ、養育環境への懸念など、様々な難しさを抱えていることを報告する調査が多い。

しかし一方で、そうした支援の難しさをどのように解消、解決していくかについて、実証的に示す研究はまだ少ない。保育者が保護者支援の際に感じる困難性（認識のズレ等）を変容していくプロセス研究（木曾、2011）はあるものの、こうした支援の方向性を示すような研究が今後ますます必要となるだろう。今後の研究の方向性については、まず保護者の心情や状況の理解には、どのような要因（保育経験、年齢、クラス状況など）が関係しているのか、また保護者と良好な関係形成するにはどのような方法（相談スキル、具体的助言・提案）が有効であるかなど、量的・質的にも実証的に検討していく必要があるだろう。また、家庭が抱える状況や保護者のタイプなどによって、どのような困難性があり、またどのような支援が有効かについて、事例・調査研究のさらなる蓄積も必要といえる。さらに、保育者と保護者の視点は一致しないことも推測されるため、データ収集（倫理的課題等）の難しさはあるが、保護者側からの主観的体験や意識についての探求も併せて重要課題と思われる。

3. 保育者（現場）支援および保育者の専門性の向上

最後に「気になる」子どもを抱える保育現場の支援については、コンサルテーションを中心にその成果が報告されている。まず、保育現場へのコンサルテーションの有効性として、保育

者の心理的な負担の軽減や保育者の専門性の向上に寄与する可能性が示されている。そして、コンサルテーションをより有効に機能させるためには、保育者の主体性をどのように促進できるかが重要な鍵との見解が多く報告される。また数としては少ないが、コンサルテーションプログラムの提案や効果を検証する研究も徐々に発表されている。これらの研究では、保育者の主体的な協議参加への工夫など、プログラムの進行とともに、子どもの行動の可視化・共有化するための客観的指標の提案もなされている。

現在、保育現場では、発達障害やその周辺に属する「気になる」子どもの増加に伴い、保育者の困難さが増している。また、多くの保育者が心理職等の外部の専門家の助言を求めている状況も報告されている（藤後ら、2010）。しかし、現在、保育現場には一部の地域を除いて、機能的コンサルテーションを行える仕組みが充実しているとは言い難い。そうした状況を踏まえると、今後はまず、こうしたコンサルテーションの有効性を示す研究成果を蓄積し保育者を支援する体制作りの根拠を確立することが、重要な課題といえるだろう。

さらに、実践報告や事例研究だけではなく、保育者の主体性を発展させるには、どのような要因（支援頻度、保育者の意欲、保育者のスキル・能力、コンサルタントの力量）が重要なのか、相手や状況に応じてどのようなプログラム（情報提供、スキル学習、内省のプロセス）が効果的なのか、プログラムの効果研究も必要といえるだろう。一方で、保育者の心理的負担については、主観的側面（感情面など）や変容プロセスについてより詳細に検討するとともに、そのサポートについてもコンサルテーションの有用性、職場内サポートなど他の要因も含めて実証的に検証することも重要な課題といえるだろう。

V. 引用文献

阿部 美穂子『気になる子どもの保育における効果的な巡回相談スタイルの実践的検討：保育所（園）長アンケートの分析』 富山大学人間発達科学部紀要 7(2)、41-53、2013

阿部 美穂子『保育士が主体となって取り組む問題解決志向性コンサルテーションが気になる子どもの保育効力感にもたらす効果の検討（第1部〈特集論文〉保育と特別支援）』 保育学研究 保育学研究 51(3)、379-392、2013

藤井千愛、小林真、張間誠紗『保育園における“気になる子ども〔特別なニーズを有する子ども〕”への特別支援保育』 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要教育実践研究 5 131 - 139、2010

深谷 英治、江田 裕介『他児との関係形成が困難な「気になる」子どもに対する保育コンサルテーション』 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 21、9-16、2011

藤原 直子、大野 裕史、日上 耕司、久保 義郎、佐田 久真貴、松永 美希『「気になる子」を担当する幼稚園教諭への集団コンサルテーションプログラムの効果（実践研究）』 行動療法研究 36(2)、159-173、2010

- 郷間英世・圓尾奈津美・宮地知美・池田友美・郷間安美子『幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究』京都教育大学紀要 113 81-89
2008
- 郷間英世、川越奈津子、宮地知美、郷間安美子、川崎友絵『幼児期の「気になる子」の養育上の問題点と子どもの行動特徴：保育園の巡回相談事例の検討』京都教育大学紀要 115、123-130、2009
- 平野華織、水野友有、別府悦子 [他]『幼稚園・保育所における「気になる」子どもとその保護者への対応の実態：クラス担任を対象とした調査をもとに(第2報)』中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要(13)、145-152、2012
- 平澤紀子・藤原義博・山根和夫「保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究」：障害群からみた当該児の実態と保育者の対応および受けている支援から 発達障害研究 26、256 - 267、2005
- 磯野真紀子、井上厚子『「気になる子ども」の保護者への支援について：保育園・幼稚園における事例研究』平安女学院大学研究年報(12-2)、1-11、2012
- 飯島典子『「気になる」子どもの社会的遊びへの参加』発達研究 23、1-13、2009
- 金井優実子・田中康雄・室橋春光『軽度発達障害の疑われる子どもの養育者が持つ困難の特徴と支援のあり方についての検討』小児の精神と神経、47(2)、101-107、2007
- 金田利子・今泉依子『集団保育における個別指導(1)ー保育園において「気になる」といわれている子どもに着目して』日本発達心理学会第11回発表論文集 pl19、2000
- 神長美津子『支援のための取り組み(1) 幼稚園・保育所における取り組み』無藤隆・神長美津子・河村久・柘植雅義「気になる子」の保育と就学支援 東洋館出版 14-17、2010
- 小林真「保育園のクラスを対象とした社会的スキルの発達支援」臨床発達心理実践研究 第8巻、8-16、2013
- 小松昌代・小林真『高機能広汎性発達障害のある男児に対する支援的な保育：ルールのあるゲーム遊びを通じたクラス集団への介入を通して』教育実践研究：富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 9、51-60、2014
- 小谷隆史・山下勲『「気になる子ども」の実態とその対応に関する研究』安田女子大学心理教育相談研究、7、1 - 14、2008
- 守巧『多動・衝動性が強いA児の事例からみた幼稚園における担任への支援体制の構築』東京福祉大学・大学院紀要 2(2)、151-160、2012
- 守巧、松井剛太『保育現場における気になる子どもの保護者支援：気になる子どもと似た特性のある保護者の実態把握』香川大学教育実践総合研究(27)、35-44、2013
- 守巧 山崎 摂史 駒井 美智子『「気になる子ども」に対する保育の検討ー「対象児の支援」「クラス集団作り」「保育展開の工夫」の視点からー』東京福祉大学・大学院紀要、4(1)、23-31、

2013

- 増田貴人 石坂千雪 『「気になる子」への保育援助をめぐる保育者の認識や戸惑い』 弘前大学教育学部紀要 110号 117-122、2013
- 松永 あけみ 『「気になる」子どもへの保育者の対応と周囲の子どもたちへの影響に関する保育者の意識調査』 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 62、139-145、2013
- 溝口 綾子 『「気になる子ども」のいる保育に関する研究：帝京こども教育研究会発表事例の考察』 帝京短期大学紀要 (18)、67-72、2014
- 中田 洋二郎 筒井 恵里子 『現在の発達障害における母親の精神的ストレスについて一定性的データ分析の試みを通して一』 立正大学臨床心理学研究 12、1-12、2014
- 中島 正夫 竹尾 晃子 谷野 亜美 『保育所に通う発達障害を持つ子ども・「気になる子」の状況について』 椛山女学園大学教育学部紀要 (5)、69-80、2012
- 野村 朋 『衝動性が高い子どもにおける自制心の形成過程：集団保育実践のあり方の検討』 創発：大阪健康福祉短期大学紀要 5、103-110、2007
- 野村 朋 『保育現場における「気になる子」に関する研究の動向：保育問題研究大会の実践提案にみられる推移と傾向から』 創発：大阪健康福祉短期大学紀要 (12・13)、3-14、2014
- 大神 優子 『「気になる子」に対する保育者と保護者の評価 --SDQ(Strengths and Difficulties Questionnaire) を利用して』 和洋女子大学紀 51、179-187、2011
- 大野 和男 『クラスメートとしての「気になる子ども」』 鎌倉女子大学紀要 (20)、49-57、2013
- 尾崎 啓子 吉川 はる奈 『私立幼稚園における「気になる子ども」の保育の困難さに関する調査研究 -- 自由記述の分析を中心とて』 埼玉大学紀要 教育学部 58(2)、197-204、2009
- 下野未紗子 稲富眞彦 『保育所における「気になる子ども」一行動特徴、保育者の対応、親子関係について一』 高知大学教育学部研究報告 第 67 号、11-20、2007
- 丹葉 寛之、大西 満、尾藤 祥子 『「気になる子ども」を捉える思考プロセスの形成 - 保育士に行った間接的支援の実践報告 -』 藍野学院紀要 25、29-36、2011
- 藤後悦子、坪井寿子、竹内 貞一、府川昭世、田中マユミ、佐々木圭子 『保育園における「気になる保護者」の現状と支援の課題 一足立区内の保育園を対象として一』 東京未来大学研究紀要年 第 3 号 85-95、2010
- 湯澤 美紀 湯澤 正通 『仲間とともに育つ：アスペルガー症候群の子どもの体験と成長』 保育学研究 48(1)、36-46、2010

The Research Movement and Perspective of “Difficult” Children at the Nurture Places

Tomoya NAKAYAMA

Department of Education and psychology, Faculty of Humanities,
Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanisi-ku, Kitakyushu-shi, Fukuoka, 807-8586, Japan

Abstract

Currently, care for "difficult" children and support for their parents is an issue in actual settings of daycare. Furthermore, in recent years, much research has been done on such children. Thus, aiming to contribute to the development of future research and the practice of daycare, this paper organizes the trends in research on "difficult" children in the ten years between 2005 and 2014 into three viewpoints: "the content of care and support for children," "guardian support" and "daycare provider support." Research on "the content of care and support for children" shows the potential of raising "difficult" children based on social interaction in a way that takes advantage of the characteristics of daycare classes (peer relationships). Furthermore, there is a wealth of empirical research regarding how daycare providers approach such children. Research on "guardian support" often reports that daycare providers are experiencing difficulty; it is frequently pointed out that when there is a gap in awareness regarding child-rearing between them and guardians, this difficulty becomes pronounced. Research on "daycare provider support" points out the potential of contributing to the reduction in daycare providers' psychological burden and to the advancement of their expertise as effective ways to provide consultation in actual settings of daycare.